

月刊

# いじろのとも

第十三卷

五月号

こころを失った人々

アメリカ

ばかりではない

豪州でも

聖職者の

子どもへの

性的虐待が

多いという

福祉関係者も

その例外ではない

人のこころを

大切にすべき人々

そうした人々さえも

こころを

失っている

宗教に名を借りた戦争

宗教に

名を借り戦争

行うが

世界のはやり

世も末と知れ

# 人生を考え直して

## みたい人は(一〇〇)

空海『即身成仏義』解説(三)

(一)二經一論八箇の証文(前回つづき)

(7)また竜猛(りゅうみょう)菩薩の『菩提心

論』に説かく、「真言法の中にのみ即身成仏するが故に、これ三摩地の法を説く。諸教の中において闕(けつ)して書せず」と。是説三摩地とは、法身自証の三摩地なり。諸教とは他受用身所説の顯教なり。

(8)またいわく、「もし人仏慧を求めて、菩提心に通達すれば、父母所生の身に、速やかに大覺の位を証す」と。

是(かく)の如くに等(ら)の教理証文に依つてこの義を成立(じょうりつ)す。

参考までに、那須政隆著『即身成仏義の解説』(成田山仏教研究所刊)の中で、現代語訳に当たる【大意】を紹介します。

「 \* \* \*

(7)また、竜猛(りゅうみょう)菩薩が著作せられた『菩提心論』にも、次の如く即身成仏の実義が説かれている。真言密教以外の仏教、即ち小乗仏教、法相・三論・天台・華嚴等の大乘仏教は、何れも衆生の個性や能力に相応して、変化(へんげ)身の仏が説かれた心病と薬的な方便教であるから、たとえ煩惱即菩提とか、凡心即仏(ぼんしんそくぶつ)とかと説くことがあつても、それは心本色末(しんぼんしきまつ)「現実(げんじつ)は心の現れであるとして、心を主とし、物を従とすること」の教理によつて、すべてを心に歸入せしめて論ずるものである。

真言密教は物心一体の思想であるから、現実のすべて、特に普通には煩惱の如く言われる人間の欲望や本能をも、それは本質の面から見て、清浄な菩提性とする。一般の仏教と真言密教とは、上述のように異なっているが、さらに強調したいのは、即身成仏の実践方法を説くのは、真言密教のみで、他の諸大乘には全然ないという点である。

即身成仏は真言宗独自の法門である。『菩提心論』にこのように真言密教のみが、即身成仏する旨を説くので、今それを証拠の文として挙げられたのである。

(8)同じく『菩提心論』に又、説かれている。若し

真言行者が、仏の一切智々を求めて、自心の実体なる菩提心に到達し、永遠の相に於ける自心に安住したならば、父母より受けたる此の肉親そのままにして、速やかに仏の大覚位を証得するのである。この文は明らかに即身成仏の義を説けるものであるから、大師は証拠の文として挙げられたのである。

上述の如く通達菩提心を成就すれば、即身成仏を達成するのであるから、真言密教の即身成仏は、煩惱を対治して成仏するというものではなく、本来成仏している自心、自然法爾（じねんほうに）のままに覚知するにある。上に挙げたような八箇の、教えを説く証拠の文章によつて、この身のままで仏になり得るという意義が成立するのである。

\* \* \*

本文と大意をお読み頂ければ、弘法大師空海が言わんとされているところは、十分ご理解頂けると思いますが、両者に出てくる、難しそうなことばを解説しておきます。まず、竜猛菩薩ですが、これは、今年の二月号に述べていますので、そこをご覧頂きたいと思います。ただし、そこでは、竜猛菩薩ではなく竜樹尊者として紹介されています（そこでも触れています）。インド名はナーガ

ルジュナと言われますが、漢語への翻訳に二通りあるということですが。なお、主著はこの『菩提心論』のほかに、『中論』『大智度論』『十住毘婆沙論』など、多数あります。

次に、少しややこしい話で恐縮ですが、本文の「他受用身」ということばの解説をしておきたいと思います。

これは、「自受用身」に対応することばです。他受用身とは、他人（衆生）に法楽（さとり）の楽しみを享受させる仏の身体で、報身（応身とされることもある）と呼ばれるものであり、自受用身とは、法楽を自ら享受する仏身のことです。ここに出たことばで言いますと、自受用とは「法身自証の三摩地」に住し、大楽（法楽）を享受することばです。ですから「法楽を自ら享受する仏身」は、報身や応身に対して言いますと、法身であると言えます。なお、『大意』に出ています「変化（へんげ）でいう、報身にあたっています。

報身とか、応身とか、法身とか、化身とか、様々な仏の身体（仏身）が出てきて、何のことかお分かりになりにくいと思いますので、ここで少し「仏の身体」のことについて解説しておきたいと思います。

釈尊の入滅後、仏教が発展する過程で、釈尊が説かれた「絶対的真理や法」そのものを表すために、それを、釈尊の身体になぞらえて「法身」と呼ぶようになりまし。そして、それに対して釈尊ご自身（の身体）のことを「生身・色身（現実身）」と呼びました。それが二身説と呼ばれるものです。

しかし、その後、さらに発展して、三身説が現れました。そこでは、法身と色身の他に、新たに、「報身」がたてられました。

三身説では色身は、「絶対的真理や法」をになつて衆生済度（しゅじょうさいど）のためにこの世に応現（おうげん）した人格身とみなされ、「応身（化身）」と呼ばれるようになりました。

また、仏となるための因としての行を積み、その報いとしての完全な功德を備えた仏身として、新たに、前述の報身が立てられたというわけです。なお、三身説には、この他に「法身・解脱身・化身」や「自性身・受用身・変化身」といったものもあります。

【大意】の中には、「煩惱即菩提、凡心即仏（ぼんしんそくぶつ）」や「真言密教は、・・・煩惱の如く言われる人間の欲望や本能をも、それは本質の面から見て、清浄な菩提性とする」や「即身成仏は、煩惱を対治して

成仏するというものではなく、本来成仏している自心を、自然法爾（じねんほうに）のままに覚知する」といったことばが出てきますが、なかなか難しくご理解頂けないのではないかと思いますので、少し解説しておきます。

まず、「煩惱即菩提、凡心即仏」ですが、凡愚のもつ煩惱が、即、菩提（さとり）だとか、凡愚の心が、即、仏だと言うわけですが、なかなか難しいと思います。

実は、私の理論でいいますと、ここでいう「煩惱」とか「凡心」は「自己」の髄識（無意識）である「精髓」に宿った「生きる力、あるいは生きようとする衝動」と呼べるものです。また、凡心即仏の「仏」は、「他己」の髄識（無意識）である「神髄」に宿った「如来あるいは慈悲・愛」であるわけです。そして、「菩提」は、この精髓と神髄が髄識の中で統合されたとき、実現するものです。ですから、難儀なことですが、意識して「あたま」で分かるようなものではないのです。

私たちは、本来、神髄に如来（仏）を宿して生まれていますので、それを「自然法爾のままに覚知」するだけで、即身成仏できるのです。煩惱は否定（対治）しようとしてできるものではありません。密教の修行をして即身成仏したとき、勝手に煩惱への執着が消えるのです。そして、その時だけ、「清浄な菩提性」となるのです。

## 自作詩短歌等選

### 寛容と和・平和共存

カイサル（シーザー）が  
最期にコインに  
刻んだことばは  
寛容

ローマを六百年  
続けさせた  
精神が  
そこにある

それは  
わが聖徳太子の  
和の精神と同じ

凡夫は

神仏の前で

己の愚かしさを

自覚し

人間同士互いに

許し合うことで

和すことができる

それが

平和共存する

ということ

### 民主主義国代表

自分だけ

核強化する

アメリカさん

これぞまさしく

民主主義国

### 鯨を食うは許せない

あの可愛い

鯨を食うは

許せない

環境保護でも

許せない

自己の選好

譲らず主張

これぞまさしく

民主主義

### 民主主義が最高

民主主義

最高制度と

思う人

多くて現世

地獄絵と化す

### 男性受難時代

自殺者の7割は

男性

特に中高年の自殺者が

急増しているという

男はいま受難の時代

リストラ

失業

役割喪失

家庭での地位低下

## ボランティアの義務化

ボランティアの

義務化が

叫ばれている

他己の萎縮した

日本人にとって

ボランティアを

義務化することは

納税の義務と同様に

いやいやするもの

になってしまう

それは

ボランティアの

趣旨に

違反する

ボランティアは

自発的

自己犠牲

あるいは

他者奉仕であり

させて頂いて

ありがたい世界

なのだから

## 専心勤労の消失

いま 日本から

匠の世界

技の世界が

消えている

それは

職人や農夫の

「専心勤労」が

なくなっている

ということ

## やる気のない日本人

ソルトレーク冬季五輪で

日本のメダル獲得は二

ちなみにアメリカ三十四

「なさけない」

と言うことなけれ

国力の差を思えば

二でも多いのだ

と新聞が論評す

でもこれは

国力の差ではなくて

やる気の差なのさ

他己を無くした

日本人に

やる気が

起こるわけがない

## 人類の行く末

政治家の吐く言葉に

真実がない

学者の主張する言葉にも

真実がない

裁判官の判決にも

真実がない

僧侶・牧師の行いは

破戒ばかり

どこへいく

世界よ

人類よ

## 自作随筆選

### 保育の幼児虐待死事件に思う

私の住む香川県の中の香川町という町の無認可保育園で、悲惨な事件が起きました。その園長が、預かっている一歳児を踏みつけて、死亡させるといふ事件です。この園長は、虐待を常態に行っていたようで、この他の幼児にも虐待をしたということで、殺害容疑だけではなく、傷害容疑でも逮捕されています。

これまでに、県に対してその園では虐待が行われているとの通報があり、県は立入検査をし、子どもたちを衣服をつけたままで観察したところ、虐待の事実は判明しなかった、ということ、見過ごされたようです。でも、保育が少ないということで、増やすように勧告をうけていました。警察の取調べに、この園長は、厳格な「しつけ」をするために、たいたたりしたことがあることを、認めているといます。

これまでも、無認可保育園での虐待による幼児の死亡事件が何度も起きています。例えば、一番最近の例ですと、一昨年七月に明らかになった神奈川県大和市の無

認可託児所の例です。

私も、実は、二人の子どもを夫婦共働きで、育てた経験があります。その当時、私たち夫婦の両親は、共に、遠く離れて住んでいましたので、保育に欠ける状態でした。ですから、誰かに預かってもらわなければならなかったのですが、当時は、0歳から預かってくれる保育所が少なく、希望しても殆ど入所できない状態でした。やむなく、近所の人に頼んで預かってもらったり、同じ悩みをもつ親が民家を借りて無認可で開いている託児所に預けたりして、何とかしのいで来ました。子どもが病気になったりしたときは、夫婦のどちらかが休まなければならず、とても、大変な思いをしました。

この現実、今も、殆ど変わっていないようです。女性の就労が一般化するにつれて、保育所へのニーズは、ますます高まっているのですが、それに行政が追いつかないのが現実のようです。

なにせ、老人福祉は票になるので、政治家も力を入れますが、若い人への福祉サービスは、票にならないものですから、おろそかにされているのだと思います。ますます、少子化していくのは必然のように思えます。

こうした現実が、劣悪な条件の無認可保育所を生み出し、結果として、子どもへの虐待がおこっているのでは

ないかと思うのです。ですから、その責任の一端は、政治や行政にあると思います。しかし、すべての責任を政治や行政だけに帰するわけには行きません。

実は、あんな、いたくない子どもにも暴力をふるう大人の冷たさが、いま、多くの人々のこころのなかに広がっていることにも、原因を求めなければならぬと、思うのです。

そのことは、しょっちゅう起こっている実父母によるわが子の虐待死亡事件をみれば、明らかです。これほどの件数で、わが子を殺す国は、世界中探しても、日本以外には、おそらく見当たらないのではないのでしょうか。

そうした虐待をする親や保母の多くは、自分の思い通りにならない子どもに「しつけ」と称して「暴力」を加えるのだと思うのです。

しかし、私の体験でも、そうですが、子どもは、暴力をふるわなくても、口で叱るだけで、十分、怖がります。いや、叱ることさえ不必要です。やさしく「そうこうしない方がよい」あるいは「こうこうした方がよい」と、そのことが分からないときだけ、教えてやるだけでよいのです。いつも言っていることですが「ああしろ、こうしろ」、「ああしてはいけない、こうしてはいけない」と、しつこく大声を出したり、暴力をふるったりして、

叱らなければならないようだ、実は、もう教育は失敗しているのです。

でも、叱らなくてもよく言うことを聞くようになるためには、ある条件を満たす必要があります。

それは、親や大人が子どもとこころを通わせている、ということなのです。今の言葉でいいますと、「コミュニケーション」ができていて、私の言葉でいいますと、「情動の共有」ができていて、あるいは、親や大人が「人の心を感じるこころ」を持っていて、それを実践している、ということなのです。

それは、分かりやすく言い換えますと、子どものこころに寄り添っている、ということなのです。子どものこころを常に受け入れてやっている、ということなのです。

そうしますと、不思議なことに、子どもは、自分勝手なことを主張はしないものなのです。そして、自然と情緒は安定し、理由も分からないのに、不機嫌になったり、怒ったり、泣いたりはしないものです。

日頃から、他者のこころをおもんばかるのではなくて、他者に指示ばかりする職業の人、あるいは、そういう性格の人は、特に、気を付けて頂きたいと思います。知らず知らずのうちに、自分のこころを中心に考えますし、自分ができもしないことを、子どもに要求するようにな

ってしまっているからです。

子どものところに寄り添っていると、ここを常に受け入れてやっている、とか言いますと、誤解されそうですので、一々二、お断りしておかなければならないことがあります。

それは、甘やかして、ペットのように可愛がってやればいいのだと、言っているように思われることです。あるいは、「ああしろ、こうしろ」と指図・命令してもいなければ、「そうしてはいけない、こうしてはいけない」と禁止・抑制してもいけない、と言っているように思われることです。そうではありません。

親や大人と子どもがここを通わせている、ということとは、親や大人がしてはならないと思うことは、子どももそう思い、親や大人がした方がよいと思うことは、子どももそう思うということなのです。それは、甘やかしや猫可愛がりとは異質なものです。甘やかしや猫可愛がりは、親や大人の自己中心的な行為なのです。

また、指示や禁止をしてはならない、といっているわけではなく、それは、結果として、指示や禁止をしなくてもよいことであって、「しななければならぬこと」と「や」してはならないこと」がわからないときは、指示や禁止をして、教えてやる必要があるのです。

## 釈尊のごとば（一一一）

法句経解説

（三五三）われはすべてに打ち勝ち、すべてを知り、あらゆることに関して汚れていない。すべてを捨てて、愛欲は尽きたので、ここは解脱している。みずからさとしたのであって、誰を「師と」呼ぼうか。

この偈は、なかなか深遠な真理を述べた偈だと思えます。

まず、「われはすべてに打ち勝ち」ということですが、「すべて」とは、何かといいますと、最終的には自分自身ということなのです。つまり、自分自身に打ち勝ったときはじめて、全てに打ち勝ったと言えるのです。

現在の民主主義社会では、自分自身に打ち勝つことは、殆ど問題にされません。打ち勝つのは、つねに相手や自然であって、自分にはとても寛大です。他者には厳しく、自分にはやさしくすることこそが、大切なこととされているように思えます。「克己勉励」は、昔のこととなつてしまいました。しかし、私たちが、真の幸せに至るためには、自分自身に打ち勝って（克己）、修行精進

(勉強)しなければなりません。自墮落になることは、真に戒めなければなりません。

例えば、仏教で菩薩に課される実践徳目である六波羅密は、布施、持戒、忍辱(にんにく)、精進、禪定、智慧ですが、こうしたことは、すべて己に打ち克つてはじめて実現できることです。

次に、「すべてを知り」とありますが、これを間違つて取つて、この世のあらゆることを知っている、例えば、隣の犬が何匹、どんな色の、どんな大きさの子を産んだか、といったことまで知っている、と解釈してはなりません。これは、ソクラテスで言いますと、「無知の知」ですし、老子で言いますと「無為而無不為」、これを知に当てはめて「無知而無不知」ということです。これはどこまでもその人の心境であつて、具体的な事実ではないのです。

では、事実がまったく伴わないかと言われれば、そんなことはありません。例えば、読むことで言いますと、百科事典にはとても多くの事が書かれていますし、また、世界中には書物は無数に存在しています。でも、そうした書物は読まなくても、読んだと同じだという心境を持てるのです。つまり「無読而無不読」なのです。それは、肯定的に言いますと(傲慢に聞こえますので、普通は否

定的にしか言わないのですが)、全知全能ということ、人生の真実、宇宙の根源的原理について、どの本にも、もはや、教えられるものは含まれていない、ということなのです。言い換えますと、あらゆる人生の問題にそうした書物を読まなくても、間違いなく答えることができる、ということなのです。

次の「あらゆること」がらに關して汚れていない」ということですが、これも、労働すれば汗をかき、泥にまみれて、汚れるではないか。あるいは、何日か風呂に入らなければ、垢が付くではないか。なのに、なぜそんなことを言うのか、と思われるかもしれませんが、そんなことを言っているわけではありません。これは、どこまでも心境(精神)のことを言っているのです。

実は、私たちは、髓識(無意識)の他己の部分である神髓に仏(如来)を、また、自己の部分である精髓に生命力を宿していますが、誕生した当初は、両者が未分化ですが統合されています。私たちの心は、そうした統合された状態にある時、とても清浄(しょうじょう)なものなのです。心性本浄説では、それを「自性清浄」と呼びますが、それが汚れるのは、「客塵煩惱」によるとすのであるのです。そうした客塵煩惱によって、私たちが成長の途中で付けた心の垢を、修行によって払い落とし、清め

ることを「離垢清浄」と呼んでいます。

ここでいう、「あらゆることさらに汚れていない」とは、そうした、こころを磨いて、離垢清浄に至ったことを言っているのです。

次の「すべてを捨てて、愛欲は尽きたので、こころは解脱している」に移ります。まず、「すべてを捨てて」ですが、これは、具体的には、出家してあらゆる財産を捨て、世間のしがらみを捨てることも意味しますが、しかし、そうできたからといって、「すべてを捨てて」いけるわけではありません。ここで言いますのは、こころのいかなる執着をも捨てている、ということと言っているのです。最終的には、命への執着も断っている、ということなのです。逆に言いますと、不死の生命を得ているということなのです。

そうなったとき、次の「愛欲はつきた」と言えるわけです。愛欲が何かにつきましては、もう何度も述べてきました。昨年十月号の偈(三四〇)での解説にもっとも、包括的に検討しています。ご参照下さい。

また、そうなることが、次にありますように「こころは解脱している」ということなのです。

私は、この「解脱」ということを聞きますと、真言密教で得度した後、伝法灌頂を受けるために四度加行と

いう修行をした時のことを思い出します。それは、「聖如意輪観世音菩薩念誦次第」の最初のあたりにあたった、次のような文句です。「五分法身を磨瑩(まよう)すと思(おも)へ。五分法身とは、戒、定、恵、解脱、解脱知見なり」と。なお、「磨瑩(まよう)す」とは、塗香(ずこう)で清浄にすることを言います。このことを私の体験に照らして、説明してみますと、戒律(戒)を守って、身を清らかにし、禅定(定)によって心を静めます。わたしは、これをヨーガによって実現しました。

その結果、智慧(恵)が得られました。それは、知識ではなく、価値判断の直観です。それによって、ますます経典や哲学書などの理解が深まりました。でも、解脱したという思いはありませんでした。前述の修法ではじめて、解脱したと思えました。その思いは、すべてが清浄で、あらゆる存在が自分と一体であると思えだした、ということなのです。その結果、解脱知見を得ました。それは、後に発展させた、私の学問そのものです。

私は弘法大師空海を直接の師と仰いでいますが、でも、この解脱・解脱知見に至る体験自体は、どこまでも、私自身のもので、誰からも教えられたわけではありません。そういう意味で「みずからさとしたのであって、誰を(師と)呼ぼうか」ということになるのだと思うのです。

後記

一、周囲の山が、新緑におおわれ、とてもすがすがしく感じています。

二、畑の作業が忙しくなってきました。

三、一昨年から、枸杞(くこ)を作っていますが、これまで、あまりよくできませんでした。もともと野性の木だからと思い、ほとんど手入れをしなかったのです。今年、畝の間にカヤを敷きつめ、草を取り、灰とカセイ肥料と鶏糞(うこつけいのもの)をやりました。また、小さなナメクジのような虫が発生し、葉を食い尽くしてしまいきますので、スミチオンを散布しました。そうした手入れのお陰で、これまで見たこともないほど、青々とし、大きな葉っぱが出ています。先日、葉を取って、炒めて食べました。

四、夏野菜を一齐に植えました。トマト、ナス、キュウリ、スイカ、オクラ、などです。また、里芋もたくさん植えています。間もなく、タマネギの収穫をしなければなりません。今年は、雨が多く、気温が高いせいか、ジャガイモがとてよくできています。

五、うこつけいを十五羽ほど飼っています。その中、四羽は家で孵化させたものです。うこつけいの産卵率はとても悪いことで知られていますが、家でも、毎日数個し

か産みません。雄が四羽いますが。産卵率を高めるにはどうしたらいいのか検討するために、四部屋ある鶏小屋(ケージのようなもの)を自分で作りました。数羽ずつ隔離してはと思うからです。

六、先日、近所の方に孟宗竹を苗として掘らして頂いて、家と山(畑)に二本ずつ植えました。活着するかどうかわかりませんが、なんとか増えてくれれば、と思います。また、竹と言えば、JAのマーケットで「朱竹(あかだけ)」という珍しい竹の苗を千円で買って植えました。昨年、以前住んでいた家から取って来た、黒竹が二株だけ活き着き、細い筍が出てきました。

月刊 こころのとも 第十三巻 五月号 (通巻 一四九号)	平成十四年五月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>じょうせい</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

